

O2-003

小学生における QCD の性差と得点分布の特徴

～同一コホートにおける横断調査～

中山 智博¹、滝澤 恵美²、市川 睦³、
海野 潔美⁴、大黒 春夏⁵、深谷 雅博⁶、
岩松 洋平⁷、西村 一⁸

¹ 茨城県立医療大学保健医療学部医科学センター

² 茨城県立医療大学保健医療学部理学療法学科

³ 茨城県立医療大学保健医療学部看護学科

⁴ 茨城キリスト教大学看護学部 ⁵ 茨城県立医療大学付属病院小児科

⁶ 社会福祉法人清香会あゆみ園 ⁸ 総合守谷第一病院小児科

⁷ 総和中央病院発達支援事業所はなもも

【目的】

子どもの生活機能を評価するツールの1つである「子どもの日常生活チェックリスト(QCD)」は、日常生活における子どもの実際を把握するために臨床、あるいは学校等で利用されている。しかし、得点分布や年齢特性は示されておらず、“生活の困難さ”の解釈に苦慮することがある。本研究は、小学生を対象にQCDを実施し、各評価項目の性別や学年の影響、さらに分布の特徴を明らかにして結果の解釈に役立てることを目的とした。

【方法】

A町の公立小学校全3校に通学する児童(総数493名)の保護者に協力を募り、同意が得られた1年生～6年生の321名(男児157名、女児164名)を対象者とした。対象者の学年内訳は1年生58名、2年生44名、3年生60名、4年生53名、5年生51名、6年生55名であった。調査は2022年12月中旬に行い、保護者が児童の最近1ヶ月間の様子をQCDに回答した。性別と学年がQCDの総得点と下位6項目(早朝/登校前、学校、放課後、夕方、夜の行動)の得点に与える影響を一般化線形モデルで分析した。統計解析はSPSS Ver. 28 (IBM社)で行い、有意水準は5%とした。各項目の得点分布は学年毎に四分位範囲でまとめた。本研究は茨城県立医療大学倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号1060)。

【結果】

性差を認めた項目は、QCDの総得点($p = .022$)、学校($p = .011$)、放課後($p = .025$)、夕方($p = .003$)、全体の行動($p = .045$)でありいずれも女児の得点が高かった。全項目において学年に有意な主効果は認めなかったが、学校、放課後、夜の得点は5年生または6年生と比べて3年生が有意に高かった。放課後の得点は性別と学年の間に交互作用($p = .045$)を認めた。得点分布は、夜の項目では高得点者が多く天井効果がある一方で、外れ値が多く出現した。

【考察】

同一コホートの小学生のQCDの結果に性差を認め、高学年では低下する項目もあった。また、各項目で分布の大きさや外れ値の出現数に違いがあった。QCDの結果には子どもの自我の発達、評価者である保護者の子どもの成長に対する期待等の影響が含まれていると推察され、“生活の困難性”として本評価を利用する際には考慮する必要があると推察された。今後は縦断調査を実施し、加齢に伴う変化を検討する。

O2-004

IBDと診断された思春期の子どもへ向けた復学時支援プログラムの作成と実施・効果検証

高野 祥子¹、松本 祐佳里²、堤 信³、高津 典孝³
甲斐 さゆり³、大畑 千賀³、久部 高司³
井上 貴仁³、平井 郁仁⁴、小川 厚³

¹ 福岡大学筑紫病院・看護部

² 福岡大学医学部看護学科

³ 福岡大学筑紫病院

⁴ 福岡大学病院

【背景】

炎症性腸疾患(以下IBD)患者数は増加傾向にあり好発年齢は10～30代と若年者である。その為思春期に発症・診断されることも少なくない。研究者らは2019年から思春期の発達段階の特性に合わせた支援プログラムの知見を積み上げることを目的として活動してきた。2020年の調査では子どもたちと医療・教育・デザインの専門職が協働し、学校生活を送る上での出来事や対処法等の体験談を、イラストを多用に使った冊子「学校生活がよりよいものになるために」を作成した。2022年に実施した本研究では、前回調査で特に学校生活において影響があったとされた学校行事にフォーカスをあて、子どもたちから得られた実体験と基に各分野の専門職と検討し冊子の改定版の作成を計画した。又、既に作成している冊子の利活用について調査を行った。

【方法】

対象は、IBDと診断され、かつA病院外来に通院及び入院する10～18歳とした。研究参加への同意を得た後、冊子「学校生活をよりよいものにするためにーIBDと診断されたあなたへー」(以下、冊子)を手取る前後に、冊子及び学校生活について尋ねるアンケート調査を実施した。また、オンラインにて患者参加型のワークショップ(以下WS)を計画した。尚、本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を得ている。

【結果】

事前アンケートには11名、事後アンケートには8名から回答を得て、そのうち4名がWSに参加した。事前アンケートでは「診断後学校行事への参加」に変化があったかどうかについて11名中7名が参加しない等の影響があったと回答した。影響があった7名のうち6名が「疾患が要因である」と回答した。また、冊子に関し「発症から診断までの不安」及び「修学旅行」に関する項目で8名中それぞれ3名が最も共感したと回答した。

【考察】

IBDと診断された子ども達は、学校行事の参加についても疾患が要因となり影響を受けるケースが複数あることがわかった。また個別の課題に対し各個人で対処する様子があり、医療・教育分野による横断的な連携と支援の必要性が感じられた。また他者へ伝える視点でのWSは思春期の子どもが自らの意思で周囲に病気を公表したり、理解を求めたりする際のスキルを身につける等の、子ども自身の病気に関するリテラシーを高めることへの一助となったと考えられた。冊子の利活用については調査を継続し子どもたちの実生活に寄り添った支援プログラムとなるよう更新を重ねていきたい。